

協伸商会穀物レポート [KKR] Vol. 077

(2024/25年度 USDA米国農務省 12月10日発表)

① 24/25年度穀物生産予想は地域別バラつきはあるが総じて順調、穀物市場価格は安値圏の膠着相場で推移

主要穀物の2024/25年度の生産状況は、北半球では夏場の小麦に加え11月初めまでにはとうもろこし/コメ/大豆等は収穫を終え、現在は冬小麦の播種を終えている。一方、南半球では23/24年度収穫は終了し、24/25年度作物の作付期から生育初期を迎えている段階である。全体の生産状況は今まで述べてきた通り国別地域別のバラつきはあるが総じて順調であり、世界穀物生産量は28.3億ト、大豆は4.3億ト=合計32.6億トと2000年実績穀物18.5億ト+大豆1.8億ト=20.3億トを12億ト超(1.6倍)上回り、昨年に引き続き史上最高を更新する見通しである。また、市場価格も下記に示した通りこの2012年以降の安値圏の膠着相場となっている。

② 穀物物流はパナマ運河の水位低下による航行制限はほぼ解消したが、BRAアマゾン川渇水による影響が深刻化

パナマ運河は渇水によるガツン湖の水量不足から昨年7月以降航行制限が続き、1日当たり11月25隻/12月22隻/今年2月18隻と最悪の状況となったが雨季の到来に伴い、5月末以降順次制限は緩和され9月以降は通常の36隻まで回復している。しかし、航行制限期間中に通航ルールが通常の「ブッキング枠」の他に「オークション枠」が設定された影響で通行料が高止まりする懸念が指摘されている。一方、米国の穀物輸出競争国であるブラジルではアマゾン川とそれに関連する河川体系の渇水が深刻化しBRA北部地域からの穀物輸出に支障が出始めている。この結果、米国西海岸PNWからの回帰と併せ米国ガルフ⇒パナマ運河経由の穀物輸出数量が増加する見通しである。別表の米国とうもろこし輸出数量急増はこれを反映していると思われる。

③ 産地別特徴として、小麦はEU/ロシア/UKRは減産、AUST/ARGは順調、インドはコメ生産史上最高見通し

今年度は総じて上記で述べた様に順調な生産見通しだが、上記3カ国小麦生産量は変動が目立っている。EUは大雨の為122百万トと昨年比12百万ト減/過去10年平均比11%減、ロシアは早霜の為81百万トと昨年比1千万ト減/過去10年比6%増、またUKRは戦禍の為23百万トと昨年同/過去10年比13%減。逆に、AUST/ARGはラニーニャ現象の発生は現在見られず其々32/18百万トの生産見通しで過去10年比で見れば順調。また、インドのコメ生産量は145百万トと豊作だった前年138百万トを上回り史上最高となる見通しである。これは好天に恵まれたことと併せ綿花からの転作による収穫面積増(5千万ha/前年比5%増)と単収増が貢献している。

1、世界穀物需給の概要(大豆除く)

① 生産量:	2,826百万ト(前年比0.2%)	増↑、前月比0.1%	減↓)
② 消費量:	2,856百万ト(前年比1.4%)	増↑、前月比0.3%	増↑)
③ 貿易量:	504百万ト(前年比2.2%)	減↓、前月比0.6%	増↑)

2、小麦

① 生産量:	793百万ト(前年比0.2%)	増↑、前月比0.2%	減↓)
② 消費量:	802百万ト(前年比0.6%)	増↑、前月比0.1%	減↓)
③ 輸出量:	214百万ト(前年比3.5%)	減↓、前月比0.5%	減↓)
④ 在庫量:	258百万ト(前年比3.6%)	減↓、前月比0.1%	増↑) / (在庫率32%) うち中国134百万ト、占有率52%
⑤ 価格:	\$5.43/Bu (前年\$5.77/Bu / 前月\$5.68/Bu)	と前月比\$0.25 下落。	

⑥ 概況: 小麦生産/消費量は国別変動はあるが8億トを挟んだ動きで大きな変動はない。一方輸出量は2億トの大台を維持しながら前年比約6百万ト減少。在庫は消費が生産を上回り前年比1千万ト減少。その結果市場は弱含み5ドル台半ばで低迷している。

3、とうもろこし

① 生産量:	1,218百万ト(前年比1.0%)	減↓、前月比0.1%	減↓)
② 消費量:	1,238百万ト(前年比1.6%)	増↑、前月比0.7%	増↑)
③ 輸出量:	193百万ト(前年比0.0%)	⇒、前月比1.7%	増↑)
④ 在庫量:	296百万ト(前年比6.3%)	減↓、前月比2.5%	減↓) / (在庫率24%) うち中国204百万ト、占有率69%
⑤ 価格:	\$4.31/Bu (前年\$4.65/Bu / 前月\$4.15/Bu)	と前月比\$0.16 上昇。	

⑥ 概況: とうもろこし生産量は小麦同様EU諸国等の減産を受け前年比約12百万ト減少。消費量は堅調で逆に前年比約2千万ト増となり在庫量は3億トを割り込んだ。注目の米国の生産量は385百万トと前年比5百万ト減少したが輸出は63百万トと前月比約4百万ト増。結果期末在庫量は44百万トと前月比5百万トの大幅減少となった。市場価格はこの状況を受け\$4.31まで上昇した。

4、大豆

① 生産量:	427百万ト(前年比8.2%)	増↑、前月比0.4%	増↑)
② 消費量:	404百万ト(前年比5.1%)	増↑、前月比0.3%	増↑)
③ 輸出量:	182百万ト(前年比2.5%)	増↑、前月比0.1%	増↑)
④ 在庫量:	132百万ト(前年比17.6%)	増↑、前月比0.1%	増↑) / (在庫率33%) うちBRA34/ARG29百万ト
⑤ 価格:	\$9.94/Bu (前年\$13.25/Bu / 前月\$9.83/Bu)	と前月比\$0.11 上昇。	

⑥ 概況: 大豆生産量は南米ARG等の増産を受け需給表の通り前月比微増/前年比約3千万ト超の大幅増産見通し。消費量も増加し4億トを超えているが生産量の伸びには追いつかず期末在庫量は前年比2千万ト増の1.3億ト/在庫率33%とかなり重い。市場価格は米国产大豆のバイオデゼン燃料転換への期待等から10ドルに近いレベルまで上昇した。

世界の穀物・大豆等の需給

2024年12月10日
米国農務省発表： 単位100万トン

主要穀物世界の需給								
		生産量	総供給量	貿易量	総使用量	期末在庫量		
全穀物	2022/23	2,762	3,562	497	2,771	791		
	2023/24	2,820	3,611	515	2,817	794		
	2024/25	11月	2,828	3,618	500	2,848	770	
	2024/25	12月	2,826	3,619	504	2,856	764	
小麦	2022/23	790	1,064	222	790	274		
	2023/24	791	1,065	221	798	267		
	2024/25	11月	795	1,061	215	803	258	
	2024/25	12月	793	1,060	214	802	258	
粗粒穀物 (とうもろこし等) 注1	2022/23	1,456	1,797	220	1,461	337		
	2023/24	1,506	1,842	237	1,495	347		
	2024/25	11月	1,500	1,844	229	1,514	330	
	2024/25	12月	1,499	1,846	232	1,523	323	
米	2022/23	517	701	55	520	181		
	2023/24	523	703	57	524	179		
	2024/25	11月	534	713	57	530	183	
	2024/25	12月	534	713	58	530	182	
大豆	2022/23	378	471	172	370	101		
	2023/24	395	496	177	384	112		
	2024/25	11月	425	538	182	402	136	
	2024/25	12月	427	539	182	404	136	

世界のとうもろこし需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	11月	314.22	1,219.40	183.41	1,229.48	189.83	304.14
	12月	316.22	1,217.89	183.92	1,237.66	193.04	296.44
アメリカ	11月	44.72	384.64	0.64	321.71	59.06	49.23
	12月	44.72	384.64	0.64	322.98	62.87	44.15
アルゼンチン	11月	4.09	51.00	0.01	16.30	36.00	2.79
	12月	4.09	51.00	0.01	16.30	36.00	2.79
ブラジル	11月	5.84	127.00	1.50	83.50	48.00	2.84
	12月	7.84	127.00	1.50	85.50	48.00	2.84
EU	11月	7.48	58.80	19.00	75.10	3.30	6.88
	12月	7.25	58.00	19.50	75.70	2.50	6.55
日本	11月	1.30	0.02	15.50	15.55	0.00	1.27
	12月	1.30	0.02	15.50	15.55	0.00	1.27
中国	11月	211.29	292.00	16.00	313.00	0.02	206.27
	12月	211.29	292.00	14.00	313.00	0.02	204.27
ロシア	11月	0.76	13.00	0.05	10.20	3.30	0.31
	12月	0.76	13.00	0.05	10.20	3.30	0.31
ウクライナ	11月	1.46	26.20	0.02	4.05	23.00	0.63
	12月	1.57	26.50	0.02	4.45	23.00	0.64

世界の大豆需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	11月	112.42	425.40	177.91	402.28	181.71	131.74
	12月	112.16	427.14	178.18	403.64	181.97	131.87
アメリカ	11月	9.31	121.42	0.41	68.67	49.67	12.80
	12月	9.31	121.42	0.41	68.67	49.67	12.80
アルゼンチン	11月	24.08	51.00	6.00	47.60	4.50	28.98
	12月	24.08	52.00	6.00	48.60	4.50	28.98
ブラジル	11月	27.96	169.00	0.15	58.10	105.50	33.51
	12月	27.97	169.00	0.15	58.10	105.50	33.52
中国	11月	43.31	20.70	109.00	126.90	0.10	46.01
	12月	43.31	20.70	109.00	126.90	0.10	46.01
EU	11月	1.28	2.90	14.60	16.97	0.30	1.51
	12月	1.13	2.85	14.60	16.97	0.30	1.31

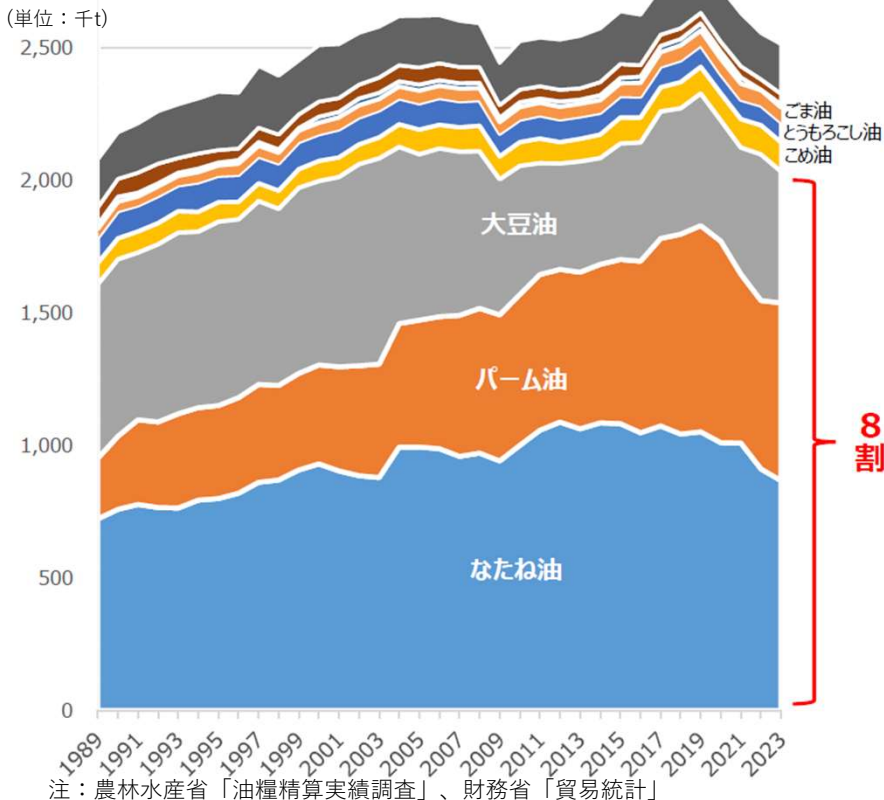
世界の小麦需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	11月	266.25	794.73	210.01	803.41	214.67	257.57
	12月	267.41	792.95	209.55	802.47	213.65	257.88
アメリカ	11月	18.95	53.65	3.27	31.24	22.45	22.17
	12月	18.95	53.65	3.40	31.24	23.13	21.63
アルゼンチン	11月	4.57	17.50	0.01	7.05	11.50	3.53
	12月	4.57	17.50	0.01	7.05	11.50	3.53
オーストラリア	11月	3.05	32.00	0.20	7.50	25.00	2.75
	12月	2.88	32.00	0.20	7.50	25.00	2.58
カナダ	11月	4.58	35.00	0.55	9.60	26.00	4.53
	12月	4.53	34.96	0.55	9.60	26.00	4.43
EU	11月	14.74	122.60	11.50	108.75	30.00	10.09
	12月	15.51	121.30	11.50	108.75	29.00	10.56
中国	11月	134.50	140.00	11.50	151.00	1.00	134.00
	12月	134.50	140.00	11.00	151.00	1.00	133.50
インド	11月	7.50	113.29	0.20	112.24	0.25	8.50
	12月	7.50	113.29	0.20	112.24	0.25	8.50
ロシア	11月	11.69	81.50	0.30	38.25	48.00	7.24
	12月	11.69	81.50	0.30	38.25	47.00	8.24
ウクライナ	11月	0.71	22.90	0.08	6.70	16.00	0.99
	12月	0.71	22.90	0.08	6.40	16.50	0.79

脚注1：粗粒穀物はとうもろこし、マイロ、大麦、燕麦、ライ麦等の計で約80%がとうもろこしである。
脚注2：年度は穀物年度。地域・作物により異なる。例：アメリカ産とうもろこし、大豆：9月～8月。

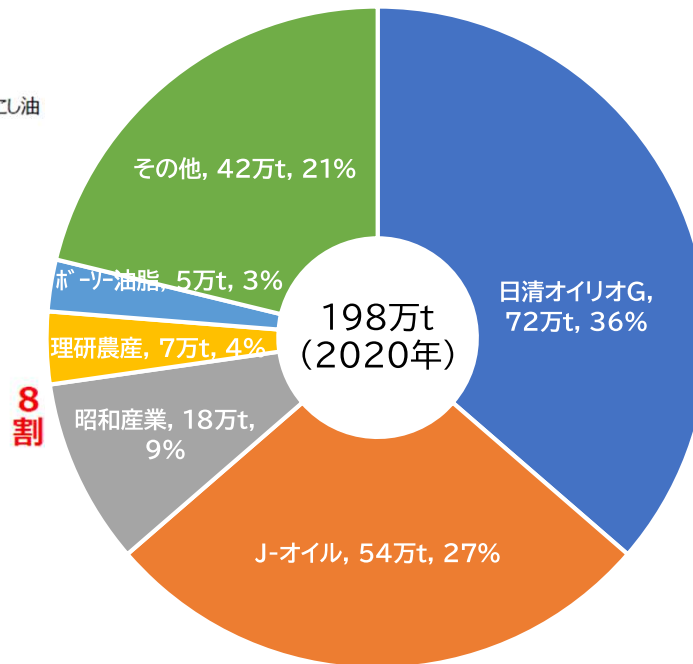
世界の穀物輸出を牽引する大豆生産の拡大と油脂需要の動向(8)

- ① 先月号まで標記のタイトルで7回にわたりレポートし、今後拡大が期待される**バイオエネルギー**分野の各国の取組み状況や課題等について書き進む予定であったがその世界はかなり奥が深く連載も長期化する可能性が有るので**別途特集を組む**こととし、今回は日本国内の油脂関連業界の動向と消費分野等について報告し、このシリーズを閉めることにしたい。
- ② [表1]は、我が国の植物油脂の油種別供給量推移を1989年以降2023までの34年間に亘ってグラフ化したものであるが、89年210万ト→ピーク時**2020年には290万ト**前後まで約4割増加。油種別には**菜種油/パーム油/大豆油の3油種で全体の約8割**を占め、菜種油/パーム油は増加傾向を示している。また、大豆/菜種は原料を輸入し国内で搾油、パーム油は粗油としての輸入が大宗を占めている。ただ世界全体の年間搾油量2.2億トに比べればその**シェアは1%強程度**に留まっている。また、日本は2000年以降大豆輸入量=年間300万ト前後、菜種=230万ト前後で世界有数の輸入国であるが、中国を筆頭とした**世界的な油糧と配合飼料原料の需要の高まり**の中で生産/貿易量が増大し**市場構造が変化**してきている。
- ③ [表2]は、国内の植物油脂のメーカー別販売量とシェアを示しているが全体約200万トの中で**日清オイリオ/J-オイルミル/昭和産業の上位3社で約7割**を占める寡占状態となっている。日本の搾油業界は2000年以降**大手の集約化**が進み04年には日清/ニッコー/リノールの3社が合併し「日清オイリオグループ」、同年ホーネン/味の素/吉原/日本大豆の4社が合併し「J-オイルミルズ」が創生され今日に至っている。しかし、今後の生き残り策としては更なる生産性向上/高品質化/製品多様化等を行い、更にもう一段の**企業統合**或いは**地域に於ける搾油機能統合**(23年、水島/倉敷に於ける日清/J-オイルの合併会社=「製油パートナーズジャパン(株)」設立)等の取組みが必須であると思われる。
- ④ [表3]は、国内の加工油脂類メーカーの販売金額とシェアを示しているが、この世界は**不二製油以下の上位5社で9割**を占めているが、特に#1の不二製油は売上高約3,300億円/シェア45%と飛び抜けている。加工油脂類の製品は表中の「注」に記載されている通り主に**マーガリン/マヨネーズ**等であるが、そこに投入される油脂類は**パーム油約64万ト**、国産豚脂15万ト/牛脂7万ト/魚油7万ト等合計約90万トにのぼり、上記③の植物油と併せ[表1]の**供給量290万ト**を構成している。このシリーズを通して言えることは、人類にとって**現代は「蛋白質とその原料の争奪戦」**の時代でありその最前線にあるのが「大豆」と多様な「油脂類」である。これら大豆粕/菜種粕等が**年間生産量12億ト**(小麦生産量8億トの**1.5倍**、穀物/大豆生産量32億トの**約4割**)の**配合飼料の重要な蛋白原料**として使用され、油脂類は肉食や食生活に欠かせない商品となり、また**バイオ燃料の原料**として用途が広がっている。この結果、**大豆生産量は2000年の約1.8億ト⇒今年度4.2億ト**と急激に拡大、**パーム油も25百万ト⇒80千万ト**と**驚異的な伸び**に結びついている。(完)

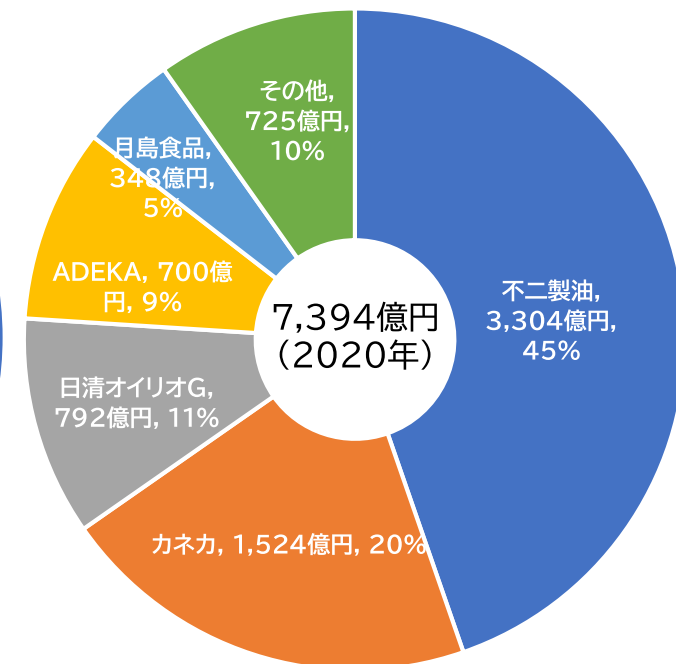
【表1】 我が国の植物油脂の供給量推移 (生産量+輸入量)



【表2】 食用植物油脂の販売量シェア



【表3】 加工油脂類の販売金額シェア



注：加工油脂類の例としては、マーガリン、ショートニング、ホイップクリーム、マヨネーズが挙げられる。食用植物油脂の例としては、大豆油、なたね油、ごま油、パーム油、ココナッツオイル、オリーブオイルが挙げられる。加工油脂類の一部は食用植物油脂が原料となっている。